

『一心千里』

永田 隆一

走って見れば、
見えてくる



第52回

京都四條通りの花見小路を南に下ると、石畳の道に沿って、大石内蔵助が主君のおだ討ちを計画して、いなとカモフラージュするために遊んだ一力屋や多くの飲食店が甲斐屋の歌舞練場まで続きます。かつてこの石畳に使われていた石柱は長さ一尺(30cm)でありました。今は10cm。紙園町で暮らしているご老人は言います。「石柱に一尺の長さを使うのが京都人のプライドでした。石柱が短くなって、人間も興行がない人ばかりになったように感じます」。

と分かっていません、弱いところばかりを拡大解釈している場合が多い傾向が否めません。米国の企業は、新しい技術を世に出すために膨大な開発費を投じます。世に出なかった技術も死屍累々です。かたや日本企業は、技術を磨き、一尺の石畳のように性能で他を凌駕できております。

「船頭多くして船、山に登るとなるリスクが高くなりませう。日本企業は多岐にわたる、とても大きな強みを有しています。強みを徹底して「標的」にする。

日本企業は営業利益率が10%程度低いという指摘がございませう。これはありえない円高とリストラの2つだけが原因です。枝葉末梢な指摘であり、笑い飛ばせませう。日本企業の強みを武器として、新市場でブルーオーシャンを見つけてくることは、意外とたやすいことであると考へます。

ウイニング・ビジネス・モデルが変化しても 世のため人のためという組織文化は変化させない

トップ企業間士の経営統合が発表されました。一新会社は、統合により250億円のコスト削減が可能となり、オランダに登記ゆえ、日本の会社の税負担は37%から17%に低減できる。

かたや日本の企業はリソースを自社内に抱え、外部は下請け業者としてコスト削減の観点でお付き合いをしません。ひたすらオペレーション・エクセレンスで、コスト削減が利益の増大に直結するという文化です。

《世のため人のため》
日本企業の品質技術を高めてくれたのは、多くの中小企業の協力がなければ語れません。そこに、米国の企業のBOM(Bill of Materials)のマネジメントが採用された場合、経済合理性という物差しで、30cmの石柱は10cmの安価な石柱に取って代わってしまいます。結果的に、日本のものづくりを遍野で支えていただいている中小企業には、大きなネガティブ・インパクトであります。

おおくべきです。そして、自分の頭で考へて考へて、考え抜いて成果を出せるであろう計画に集中することでありませう。

米国の企業は、自社内のリソースだけではカバーしきれずスピードで不十分と認識しており、外部のベンチャー企業や知財弁護士、コンサルティングとパートナーシップを結び、現在存在しない付加価値を提供するために果

《強みと弱み》
さて、人間や企業は、自分の強み、弱みを意外

その強みを組織で認識する。そして、強みをさらに磨きながら、成果を出せる計画に集中することでありませう。

さて、くだんの京都のご老人、昔の一尺の石畳はちゃんと角が丸めてあったが、今は角が出ており、つま先が上がらない多くのご老人がつかずいて怪我をされているとのことでした。「人の興行きもなくなると、おもてなしの心もどこかに落ちてきてしまったのでしよう」。

《米国内企業と日本企業》
先日、日本と米国のト

《強みと弱み》
さて、人間や企業は、自分の強み、弱みを意外

《世のため人のため》
日本企業の品質技術を高めてくれたのは、多くの中小企業の協力がなければ語れません。そこに、米国の企業のBOM(Bill of Materials)のマネジメントが採用された場合、経済合理性という物差しで、30cmの石柱は10cmの安価な石柱に取って代わってしまいます。結果的に、日本のものづくりを遍野で支えていただいている中小企業には、大きなネガティブ・インパクトであります。

その強みを組織で認識する。そして、強みをさらに磨きながら、成果を出せる計画に集中することでありませう。

さて、くだんの京都のご老人、昔の一尺の石畳はちゃんと角が丸めてあったが、今は角が出ており、つま先が上がらない多くのご老人がつかずいて怪我をされているとのことでした。「人の興行きもなくなると、おもてなしの心もどこかに落ちてきてしまったのでしよう」。

(毎月連載)